

エミリ・ディキンソンと日本の花 (2-1)

鵜野 ひろ子

Emily Dickinson and Japanese Flowers (2-1)

UNO Hiroko

神戸女学院大学 文学部 英文学科 教授

連絡先：鵜野ひろ子 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部英文学科
hiruno@mail.kobe-c.ac.jp

要 旨

2012年6月に『神戸女学院大学論集』60.1に発表した「エミリ・ディキンソンと日本の花(1)」では、*Emily Dickinson Herbarium* (ディキンソンの植物標本帳) (EDH)にある日本原産の *Lonicera japonica* の入手経路について論じたが、彼女が1855年2月にワシントンに行った際に、そこに届いたばかりのペリーの日本遠征中に採取した植物標本や生きた植物の中から幾らか分けてもらったのが最も可能性が高いと結論づけた。

その論文出版後、ハーバード大学の保管する Asa Gray 教授の植物標本のデータベース (GH) に *L. japonica* があることがわかったが、どれもペリーの日本遠征隊の採取したものではなかった。一方、同じく GH のデータベースにある Samuel Williams と James Morrow が日本遠征中に採取した植物のリストに、ペリーの『報告書』の植物リストにある351種の内の51点が含まれていることがわかった。しかしその中でも遠征隊が採取したとする *L. japonica* はなかった。

そこで確認のため、2014年2月に Harvard University Herbaria (ハーバード大学植物標本資料館) (HUH) に行き直接調べてみてわかったことは、そこには植物標本があまりに大量に保存されているため、まだデータベースに入れられていない標本が多数あるということであった。そこで、HUH の Emily Wood 女史と Walter Kittrege 氏と共に標本を探した結果、下田で Williams と Morrow が採取した *L. morrowi* だけでなく *L. japonica* も実際には保管されていることがわかった。

ディキンソンの標本中の *Lonicera japonica* がペリーの日本遠征隊の採取したものだという確実な証拠はまだないが、いろいろな状況証拠を見ると、全く可能性が無いとは言いきれない。そこで、彼女が制作した422点411種の標本のリストと、351種ある日本遠征隊の標本リストを見比べると、*Lonicera japonica* の他に14種の植物が共通であることが分かった。たまたま別の経路で両者の手に入っただけかもしれないが、本論文ではこれら共通の外来植物について調査し、ディキンソンの標本とペリーの日本遠征隊のそれとの関係を示すものがないかを検討する。なお紙面の都合上、今回は其の内の7種に限って報告する。

キーワード: エミリ・ディキンソン、日本の花、植物標本、ペリーの日本遠征

Summary

I discussed how Emily Dickinson obtained *Lonicera japonica* for her herbarium in “Emily Dickinson and Japanese Flowers (1)” in *Kobe College Studies* 60.1 (June, 2012). In it I concluded that some species, dried or alive, might have been given to her from those collected during Perry’s expedition to Japan from 1853 to 1854, since she visited Washington, D. C. in February, 1855, just after they arrived there.

After the publication of the paper, I found that among the species on the database of Asa Gray’s herbaria in Harvard University there were several named *Lonicera japonica*, but none of them originated from the expedition. However, I found on the database a list of fifty-one species collected by Samuel Williams and James Morrow during the expedition, out of a total of three hundred and fifty-one species listed in the report of the expedition. Later, I visited Harvard University Herbaria (HUH), and found that there were so many species that many of them had not yet been entered on the database. As a result of my investigation with Ms. Emily Wood and Mr. Walter Kittrege in HUH, I found not only the species *Lonicera morrowi* but also *Lonicera japonica* collected by Williams and Morrow.

Although there is not yet any evidence to prove that the *Lonicera japonica* in Dickinson’s herbarium was collected in Japan, that possibility cannot be entirely ruled out. Fourteen other species besides *Lonicera japonica* are among both the four hundred and eleven species in Dickinson’s herbarium and the three hundred and fifty-one species collected by the expedition. Although this might have happened coincidentally, in this paper I examine them individually to see whether or not there is any evidence to connect Dickinson’s herbarium and the collection brought back from the expedition. Because of the limited space, the examinations of only seven species are reported in this paper.

Keywords: Emily Dickinson, Japanese Flowers, Herbaria, Perry’s Expedition to Japan

2012年6月に『神戸女学院大学論集』60.1に発表した「エミリー・ディキンソンと日本の花(1)」では、*Emily Dickinson Herbarium* (ディキンソンの植物標本帳) (EDH) にある日本原産の *Lonicera japonica* (詩人は *Lonicera*——としかラベルに書いていないが、標本帳の復刻版(2006)の際 *Lonicera japonica* と認定) の入手経路について論じた。これまでその花は1862年にニューイングランドに持ち込まれたとされているが (Sponberg 2)、ペリーの日本遠征隊の『報告書』(Hawks, ed. 1857) の第2巻にある遠征中に採取した植物リストに、下田で採集した *Lonicera japonica* があった。その現物がワシントンに届いた直後の1855年2月にディキンソンがワシントンに国会議員の父親を訪ねている。彼女の父親は日本遠征を推進した Daniel Webster 国務長官を強く支持しており、また実際に日本で植物を採集した遠征隊の一人 Samuel W. Williams はディキンソン家やアマスト大学と深い関係のあるアメリカン・ボードから派遣された宣教師であった。それ故、彼女は日本から届いたばかりの植物を見せてもらい、さらには幾つか分けてもらった可能性がある。そうであれば、ハーバード大学の Asa Gray 教授等によって植物の名前が特定される前の早い段階で手に入れた故、*Lonicera* の一種とは判断できて正式の学名がわからなかったのも、*Lonicera*——としか書けなかったのかも知れない。他の入手経路の可能性も検討したが、これが一番可能性の高い入手経路だと結論づけた。

その論文出版後、ハーバード大学の保管する植物標本のデータベースの存在を知り、調べたところ、Asa Gray 教授の植物標本のデータベースである Grey Herbaria (GH) に *L. japonica* が8点あることがわかった。その内の1点(#277271) は1842年にケンタッキーで採取されたもので、Thunberg を参考に判定したとある¹⁾。3点(#422985、#422986、#422987) は20世紀の前半にカリフォルニアで採取され、1点(#312760) は同じく20世紀にボストンで採取されたもので、残りの3点(#293143、#309445、#297610) は21世紀に入ってからのもので、どれもペリーの日本遠征隊の採取したものではない。

また同じく GH のデータベースにある S. Williams と James Morrow が日本遠征中に採取した植物のリストに、ペリーの『報告書』の植物リストにある351種の内の51点が含まれていることがわかった。しかしその中にも遠征隊が採取したとする *L. japonica* はなかった。しかしその代わりに、函館で採取され、Grey によって *Lonicera morrowi* と命名された標本が1点(#56620) あった。確かに『報告書』の第2巻313頁に *L. japonica* の他に *L. morrowi* が記録されていて、*L. japonica* の方は下田で採取され、Carolo Petro Thunberg の *Flora Japonica* を参考に判定したもので、この種は以前から米国でも知られていて既に栽培されていると説明がある一方、*L. morrowi* の方は函館の丘で採取され、それを採取した人の名前に因んで名づけられたとあり、詳細な描写も加えられている(313)。

このように、日本遠征隊が採取した二種の *Lonicera* の内、*L. morrowi* の方はハーバード大学のデータベースにあるが、*L. japonica* の方は遠征隊の記録にしかなかった。そこで確認のため、2014年2月に Harvard University Herbaria (ハーバード大学植物標本資料館) (HUH) に行き直接調べてみた。そこでわかったことは、HUH には植物標本があまりに大量に保存されてい

るため、実際には存在していても、まだデータベースに入れられていない標本が多数あるということであった。そこで、HUHのEmily Wood女史とWilliamsとMorrowの採集した植物のデータベースを作成中であるWalter Kittrege氏の協力を得て、標本を探した結果、下田でWilliamsとMorrowが採取した*L. morrowi*だけでなく*L. japonica*の標本も実際に存在していることがわかり、写真撮影することができた(写真1、2)。そしてその結果、その標本も#518575とバーコードが付けられて、GHのデータベースに入れられることとなった。

ディキンソンの標本帳(EDH)にある*L. japonica* (52)は前述のように、既に1842年にケンタッキーで見つかり(#277271)、彼女の標本も米国で見つかった物かもしれない。しかし前述のように、1862年にニューイングランドに持ち込まれたとされていること、また20世紀に入って米国内で見つかったものの標本がHUHに保存されているということは、この種が19世紀半ばにはまだ大変珍しい植物であったからと思われる。素人の私には*L. japonica*と*L. morrowi*の区別が難しいが、標本を比べると、*L. japonica*は茎の先端に花が付いている一方、*L. morrowi*は途中についているようである。詩人のものは先端についていることと、花びらの形などから、やはり*L. japonica*で間違いがないようである。

ディキンソンの標本帳がいつ頃作成されたかという問題については、14歳の時に、友人に植物標本帳を作ることを勧める手紙(Letters 6, 7, 8)以外に確実な手掛かりはない。しかし標本帳には422点411種もの大量の標本があり、しかもその内のほぼ三分の一である133点は外来のもので、熱帯の種もある。このことはいかに彼女が熱心に植物を集めていたかを物語る一方、ある程度の期間が必要であったと思われる。また、標本に付いているラベルの文字を見ると、非常に小さく、緻密な筆跡となっている。彼女は生まれつき外斜視を患っていて、20代(1850年台)後半から目の痛みや眩しさなどを訴えており、30代半ばには、二度、ボストンの眼科医Henry W. Williamsの治療を受けるため、半年ほど、ケンブリッジに滞在していた。しかもその治療を受けても芳しい効果はなかったようで、時の経つにつれ、筆跡が大きくなっている。これらのことを考慮すると、彼女の植物標本帳は、14歳の頃から30歳前後、すなわち1844年から1860年頃までに作成されたものと推測できる。

一方、1853年から1854年にかけて収集されたペリーの日本遠征隊の植物標本は1855年1月にワシントンに届いたが、同年3月3日付でU. S. Patent OfficeからJames Morrow宛てに、乾燥させた日本の植物標本を判定してもらうため、ボストンのAsa Grey教授に送るよという趣旨の手紙が送られていた(Cole 260)²⁾。それ故、2月にワシントンを訪れたディキンソンはそれまでに、乾燥させた標本の一部を手に入れていたかもしれない。また遠征隊は様々な種子や生きたままの植物もケースに入れてワシントンに持ち帰っていた³⁾。そのため合衆国政府はワシントンの議事堂の近くに温室を建設している(鶴野 198)。ディキンソンの父親も同じ1855年に、買い戻した屋敷に彼女のため温室を作っている(Habegger 338-39)。そのことを考慮すると、詩人が1855年の2月にワシントンを訪問した際に、乾燥させた植物の標本だけでなく、生きたままの植物やまた種子も手に入れた可能性があるのではないだろうか。そして、それを自分の温室で育てて、後にそれを押し花にして標本帳に入れた可能性もあると思われる。

このように、ディキンソンの標本中の*Lonicera japonica*がペリーの日本遠征隊の採取したも

のだという確実な証拠はないが、だからと言って、全く可能性が無いとは言い切れないのである。そこで、彼女が標本を制作した422点411種のディキンソンの標本リストと351種ある日本遠征隊の標本リストを見比べると、*Lonicera japonica* の他に以下の14種が共通であることが分かった：

- | | | |
|-------|--|--|
| I. | <i>Berberis vulgaris</i> | (欧州、西アジア等原産) |
| II. | <i>Calendula officinalis</i> | (南欧州原産) |
| III. | <i>Campanula trachelium</i> | (欧州原産) |
| IV. | <i>Chelidonium majus</i> | (欧州、西アジア原産) |
| V. | <i>Equisetum arvense</i> | (北半球の極地・温暖な地域) |
| VI. | <i>Erigeron pulchellus</i> | (北半球、北米に多い) |
| VII. | <i>Pisum sativum</i> | (中央アジア、地中海地域原産) |
| VIII. | <i>Saxifraga sarmentosa</i> | (東アジア原産、米国西海岸に移入) |
| IX. | <i>Trillium, erectum</i> | (北米東部原産) |
| X. | <i>Trillium erectum forma luteum</i> | (Perry は <i>Trillium Erectum</i> , Linn. var. ALBUM) |
| XI. | <i>Vicia angustifolia</i> | (EDH でも Perry でも <i>Vicia, sativa</i>) |
| XII. | <i>Caltha, palustris</i> | (欧州、アジア、北米原産) |
| XIII. | <i>Convallaria majalis</i> | (北半球のアジア、欧州、米国アパラチア山脈以南) |
| XIV. | <i>Kerria japonica var. pleniflora</i> | (日本および中国、韓国原産) (ED は特定せず [unlabeled]) |

このように、両方のリストにある植物には、当時はまだ北米に移入されていない日本固有種の他に、欧州やアフリカ原産のものや、北米に既に生育している外来種が含まれている。たまたま別の経路で両者の手に入っただけかもしれないが、これら共通の外来植物について調査し、両者との関係を示すものがないかを検討する。なお紙面の都合上、今回は其のうちの I から VII に限る。

I. *Berberis vulgaris*: EUROPEAN BARBERRY (EDH 1, Perry 307 函館)
(Berberidaceae Family) (HUH 107 Rm 326)

落葉または常緑低木の *Berberis* (メギ) 属のほとんどの種は南米、アフリカ、アジアが原産で、欧州原産は3種、北米原産は2種のみだが、米国では英国原産で植民地時代に移入された *B. vulgaris* がその美しさゆえ好まれて、北米原産種の *B. canadensis* を数で圧倒した (Coats 25)。Breck (1859) によれば、*B. vulgaris* はボストン地域に多数植えられていた (222)。またその本の1866年版には、実が大変酸っぱいので鳥はめったに接触しないこと、時に酢漬けにして料理に添えられたり、砂糖と共に煮てジャムにされたりすること、また根が灰汁でゆでられて黄色の染料として使われる等の説明が追加されている (401) ので、ディキンソンにも身近な植物だったであろう。

日本遠征隊のリストにある *B. vulgaris* は函館で生垣から採取したもので、英国から米国に移入されたものと見た目が全く同じであるという解説がある (307)。一方、GH のデータベースには *B. vulgaris* がなく、*Berberis amurensis* があり、しかも *Berberis amurensis var. Japonica* という亜種もあることが分かった。これはペリー日本遠征隊員の Williams と Morrow によって「5月31日」(年は書かれていない) に函館の生垣から採取されたもので、その名前は1916年に付けられたとされていた (#00295732)。実際に HUH で探したところ、確かに保管されていた (107 Rm. 326) (写真 3)。しかも同じ標本紙の下方に、北太平洋探検隊 (1853年-1856年) の Charles Wright⁴⁾ が函館で採取した *Berberis vulgaris* (#00295731) が一緒に添付されていて、しかもそれは1916年に *B. amurensis var. japonica* と名前が修正されていた (写真 4)。

日本に生育する *Berberis* (メギ) 属には、メギ (*B. thunbergii*)、ヘビノボラズ (*B. sieboldi*)、オオバメギ (*B. tschonoskianna*)、ヒロハノヘビノボラズ (*B. amurensis*) の落葉性の4種がある (牧野 I 177, 牧野 II 201, 202)。European Barberry と Japanese Barberry の区別は殊に難しく、これまでもしばしば混同があったので (Plant Conservation Alliance's Alien Plant Working Group, US National Park Service)、当時函館で見つかったものも一旦は *B. vulgaris* とされたが、後に *B. amurensis var. Japonica* と修正されたようである。*B. vulgaris* (*USDA Plants*) や *B. amurensis* (牧野 II 202) の葉の形を比べると、日本各地や、朝鮮、中国、シベリア、アムールに分布している *B. amurensis* は、「広葉蛇上ラズ」という和名のごとく、「他の種類に比べ葉が広い」(牧野 II 202)。

さて、ディキンソンの標本 (1) のものは、広葉蛇上ラズのように、葉がまさに幅広の倒卵形である。また、*B. vulgaris* の花が普通は垂れている (*USDA Plants*) のに対して、ディキンソンのものは HUH で見つかった日本遠征隊の標本のように上を向いている。それ故、ディキンソンの標本は日本原種の *B. amurensis var. japonica* ではないかと思われる。それが正しければ、詩人は遠征隊の採取したのと同じ日本原産種の種を手に入れたことになる。しかも日本遠征隊の生きたものを詩人が手に入れ、育てた可能性もあるのではないかと思う⁵⁾。

II. *Calendula officinalis*: POT-MARIGOLD

(EDH 2 ; Perry 314 横浜)

(Asteraceae family)

(HUH 349, 4 : 368)

南欧原産の *Asteraceae* (キク) 科 *Calendula* (キンセンカ) 属の越年草で、日本には中国を経て移入され、トウキンセン (唐金盞、別名キンセンカ) と呼ばれている (牧野 III 8)。米国へは植民地時代に英国からもたらされ、薬草、染色用植物、香草として栽培されるようになり、19世紀には花壇用の植物になった (Sumner 328)。Eaton (1829) は外来種として紹介しており (144)、Breck の *The Flower Garden* (1859) には耐寒性がある越年草で、スープなどに使われるとも書かれている (167)。

GH のデータベースには1856年8月31日にチベットで採取された標本があるが、ペリーの日本遠征隊の物はなかった。しかし HUH で探した結果、実際には、Yokohama, Japan, W. & Morrow と書かれた標本が保管されていたことがわかり (349, 4 : 368) (写真 5)、#518579と番号が付けられた。この花の場合、外来種とはいえ、既に米国で栽培されていたので、ディキ

ンスンの標本（2）が地元で手に入れた物なのか日本経由のものなのか、不明である。

III. *Campanula trachelium*: THROATWORT (EDH 39; Perry 315 下田)

(Campanulaceae family) (HUH 345 4: 355)

日本遠征隊報告書には *Campanula trachelium* が記されているにもかかわらず、GH のデータベースにない。実際、HUH で探したが、現物がないところを見ると、*Campanula trachelium* と認められたが、この種は当時米国でも既に珍しくなかったため、保管されなかったのかも知れない。しかし日本で自生している種としては、チシマギキョウ (*C. pilosa*)、ホタルブクロ (*C. punctata*)、イワギキョウ (*C. carpatica*)、ヤツシロソウ (*C. glomerata*) の4種があるが、現在も *C. trachelium* は日本に生育しているとは認められていない。故に、他の種であった可能性がある。

一方、ディキンソンの標本帳の復刻版を出す際、この花は *Campanula trachelium* とされたが、ディキンソン自身は *Campanula, alba* としていたところを見ると、標本では黄ばんでいるが、花卉は白かったはずである。RHS Gardening によれば、Blue devil bell flower, Blue devils, Blue foxglove 等とも呼ばれるように、釣鐘状の形をした青や紫の花で知られているが、白いものもある。Eaton (1829) が *Campanula* (ホタルブクロ) 属で紹介している8種の中には *C. trachelium* はないが、Breck (1866) が載せている9種の中に *trachelium* があり、欧州原産で、6月、7月に紫や白い花をつけるとしている (150)。詩人のこの花の標本には茎や葉がなく、花卉と萼弁だけなので判断は難しいが、概してこの種は花卉が中ほどで百合のように分かれているのに対して、彼女のそれは先だけが分かれている (39)。この種は多くの亜種に分類されているので、その内の1種かもしれないが、その複雑な萼弁と花卉の先の分かれ方から、「花冠は小型で長さ30mm前後、白色」で、「はじめ伊豆七島のものに命名されたが、その後、関東の太平洋岸に点々とあることがわかった」日本原産の *C. punctata* var. *microdonta* (シマホタルブクロ) (佐竹他編『日本の野性植物』Ⅲ 153) など、ホタルブクロ (*C. punctata*) の一種である可能性もある。それ故、遠征隊に採取された種は何らかの理由で HUH に保管されず、ディキンソンの標本帳の中に入ったのかも知れない。

なお、“bellflower” という名前は、*C. rotundifolia* (harebell) 等、ニューイングランド地方では外来種である *Campanula* 属の種々の花の俗名として使われている (Farr 98)。ディキンソンの詩の中に、単に “bell” と呼んでいる花がしばしば出てくるが、実際にどの種の花を指していたのか、単に釣鐘状の花をつけるものを全て bell と呼んでいたのか、harebell を特に指していたのか不明である。

IV. *Chelidonium majus*: CELANDINE (EDH 20, Perry 307 函館)

(Papaveraceae family) (HUH 109 Rm 326)

Papaveraceae (ケシ) 科 *Chelidonium* (クサノオウ) 属に属する越年草植物で、ユーラシア大陸一帯とその周辺に広く分布し、欧州から北米へも移入され、広く分布している。日本を含む東アジアの温帯地域に分布するものはヨーロッパ原産種の一変種として扱われ var. *asiaticum* の

変種名 (クサノオウ) が付されているが (Prof. Summer's Web Garden)、その名について、牧野は「草が黄色の汁を出すから草ノ黄、丹毒を治すから瘡ノ王、また草ノ王、確かな説はない」(I 174) と解説している。有毒なアルカロイド成分を含んでいて、植物体を傷つけるとその成分を含む黄色い乳液を流し、それが皮膚に触れると炎症が起こるが、鎮静作用や知覚末梢神経を麻痺させる作用もあり、Homeopathic 治療薬としても利用された (Homeopathic Remedies)。Eaton (1829) には、外来種だが、既に北米大陸に帰化植物として認められている (171) とあるので、ディキンソンの標本 (20) も既にアマスト近辺に生育していた物かもしれない。

GH のデータベースにはなかったが、HUH で探したところ、1861年に採取された他の標本と共に、Hakodadi, William & Morrow とだけ記された *Chelidonium majus L. Japonica* の標本が見つかった (109, Rm 326) (写真6)⁶⁾。ディキンソンの標本との関係は不明である。

V. *Equisetum arvense*: Common Horsetail (EDH 39, Perry 329 函館・下田)

(Equisetaceae family)

(HUH basement)

ディキンソンは *Equisetum, hyemale* (トクサ) とラベルを付けていたが、復刻版の際、*Equisetum arvense* と訂正された。*Equisetum* 属は地球上で最も古い植物の一つで、古生代にさかのぼる石炭層から樹木のサイズの巨大な化石が発見されている多年草である (Jarvis)。トクサ属の多くは湿地帯に生育するが、南極大陸を除くほとんどの地域に生育していて約25の亜種があり、一般にこれら2種が知られている。

Eaton (1829) はトクサ属として8種紹介していて、その中に *arvense* と *hyemale* が含まれている (209)。牧野によれば、*arvense* の方は北半球の温帯以北に広く分布していて、その形が杉に似ていることから、日本では「スギナ (杉菜)」と呼ばれている。また「栄養茎 (俗にスギナ) は地下茎の縁から地上茎を出し、高さ30~40cm、緑色の円柱形、縦に隆起線があり、節から多数の枝を輪生し、節には退化した葉がさや上につく。胞子茎は、春、茎に先立って胞子穂 (俗にツクシ) を直立」する (I 301)。

一方、*hyemale*⁷⁾ の方は、日本では砥石代用の草という意味で、「トクサ (砥草)」と呼ばれているが、北半球の温帯に広く分布していて、日本では、本州中部以北、北海道の山中の湿地などに生育している (牧野 I 301)。ディキンソンの標本帳には、胞子穂 (ツクシ) しかないので、*arvense* と *hyemale* の判別は極めて難しい。

日本遠征隊の標本を HUH で探したが、やはり現物はなかった。従って、ディキンソンの標本との関係は不明である。

VI. *Erigeron pulchellus*: ROBIN'S PLANTAIN (EDH 52; Perry 314 横浜)

(Asteraceae family)

(HUH 349, 4: 368)

ディキンソンの標本には名前が書かれていなかったが、復刻版出版の際、Asteraceae (キク) 科 *Erigeron* (ムカシヨモギ) 属の一種である *Erigeron pulchellus* と認定された (52)。Eaton (1829) は *Erigeron* 属として11種と、南部に自生するもの8種、紹介しているが、そこには *pulchellus* はない。しかし *bellidifolium* の別名として *pulchellus* というのがあり、これと同一であ

と思われる。Breckがこの花に全く触れていない所を見ると、19世紀中頃では一般には知られていなかったのも、詩人も名前が付けられなかったと推測される。Marilyn J. Dwelley (1977)によれば、*E. pulchellus* は淡いライラック色または深紅色である (337)。しかしディキンソンの標本を見ると、花卉は年月が経って、変色しているのでは元の色は不確かであるが、黄色か白色であり、また複数の花の付き方、葉の形などから、*E. pulchellus* より、ピンク色の他に白い花もある、同じく米国北東部原産の *E. philadelphicus* (337)⁸⁾ の方により似ている。

さて、GHのデータベースには *E. pulchellus* がなく、北太平洋探検隊 (1853-56) の隊員の一人 Charles Wright が日本の Cape Siriki-saki で採取し、1859年に Grey 教授が判定した *E. thunbergii* var. *glabratus* (ミヤマアズマギク) という種の標本 (#6928) だけがあった。北村四郎 (『日本の野生植物 草本』) によれば、*E. thunbergii* subsp. *Glabratus* (A. Grey) は、「茎はそう生して、高さ10~35cm、長軟毛がある。花をつけない茎の根出葉はへら形、…。頭花は径3~4cm…」 (Ⅲ 192) である。*E. thunbergii* (アズマギク) の「冠毛は帯赤色で、長さ5mm。平地から山地の草原にはえる」 (Ⅲ 192) のに対して、*E. thunbergii* subsp. *Glabratus* は「冠毛は汚白色、長さ2.5mm。高山にはえる」 (Ⅲ 192) である。実際に HUH で探したところ、上記の *E. thunbergii* subsp. *Glabratus* が添付されている同じ標本紙の左上に2点、日本遠征隊の William と Morrow が横浜で採取したと報告書にある *E. pulchellus* がみつかった (349, 4:368) (写真7)。しかも見たところ、日本遠征隊のものは茎が短い。さらに、別の標本紙に、Wright が下田で発見したとする *E. Thunbergii* var. *Japonicus* とした標本2点があった。北村には *E. thunbergii* var. *japonicus* が無いので、この区別が学術的に認定されているものなのかわからないが、確かに葉の形などが異なっている。その同じ紙の左上に Williams と Morrow が下田で発見したとするが日付のない標本が2点あった。こちらは見たところ、花の色が赤みを帯びているように見える (写真8)。

E. philadelphicus は、1920年頃に日本に帰化したとされているが (清水他 357)、*E. pulchellus* は日本の帰化植物にもない。従って、まだ日本が開国されていない1854年に遠征隊が横浜で採取したものが *E. pulchellus* や *E. philadelphicus* であったのか、疑問が残る。19世紀半ばではまだ鑑定が難しかったので、日本遠征隊が横浜で採取したものは *E. pulchellus* とされたが、Wright の採取したものと同様、*E. thunbergii* var. *glabratus* や *E. thunbergii* var. *japonicus* であった可能性がある。従って、ディキンソンの標本と日本遠征隊の標本とは関係がないと思われる。

VII. *Pisum sativum*: GARDEN PEA

(EDH 57, Perry 310 横浜)

(Fabaceae family)

(HUH 165, 3:270)

Pisum sativum は新石器時代に近東 (中東) の農家で初めて栽培された作物で、大麦やカラス麦と共に欧州に広がり、大豆同様、実を乾燥させて長く保存できるので、後に植民者と共に食用として北米に渡ったと言われている (Sumner 79-80)。Eaton (1829) は外来種として挙げていて、またその変種として、*umbellatum* (bouquet pea), *quadratum* (quadrate pea), *humile* (dwarf pea) を紹介している (332)。

日本遠征隊のリストによれば、この植物は横浜で既に栽培されていたということであるが

(310)、日本では Fabaceae (マメ) 科 Pisum (エンドウ) 属の豌豆に当たる。一般に、中国に伝わったのは5世紀、日本へは9~10世紀に伝わったと言われている。

このように、この植物は日本でも北米でも長年、食用に栽培されていたので、デイキンソンも簡単に手に入れることができたはずであり、彼女の標本のものが日本遠征隊のものという可能性は低いようである。

実際に HUH で探したが、珍しい植物ではないせいか、日本遠征隊の標本は存在しなかった。

注

* 本研究は学術研究助成基金助成金 (基盤研究 (C) (23520348)) の助成を受けた研究の一部です。

* この論文は2012年12月22日、京都大学文学部で開催された日本英文学会関西支部大会で、招待発表したものの前半に、加筆・修正したものです。

- 1) なお、初めは P. Watson によって *Lonicera chinensis* と標本のラベルに書かれたが、後で *Lonicera japonica* という現在の学名がその頁の上方に鉛筆で書かれたという説明がある (HUH)。
- 2) 同じ手紙に、Grey 教授による判定後、それらの植物標本は U. S. Patent Office に戻されることになるとある (Cole 260)。しかし現在、51以上の標本が GH に存在するという事は、全ての標本が返されたわけではなかったということである。
- 3) Morrow の日記によれば、中国人大工に生きた植物を入れて運ぶケースを作らせ、苦勞してレキシントン号でワシントンまで持ち帰ったようである。特に、第4章 Homeward with Specimens (Cole 206-18) を参照。
- 4) C. Wright はイェール大学を卒業した生物学者で、1848年から1849年にかけては、Grey に招かれて、彼の採取した植物の整理を手伝っている。その後、リオ・グランデ等、世界各地の探検に参加し、多くの植物標本を採取したが、米国海軍によって組織され、Captain Cadwallader Ringgold に率いられた北太平洋探検 (the North Pacific Exploring Expedition, 1853-1856) に参加し、喜望峰、シドニー、香港、日本沿岸、ベーリング海峡、カリフォルニア沿岸などを訪れ、多くの植物を採集し、合衆国で最も有名な植物学者の一人となった (Morrell 及び HUH Home Page)。このように、ペリーの日本遠征隊の他にも、当時、日本で植物採集した遠征隊がいたのである。
- 5) なお米国では、1860年から1865年の間に *B. vulgaris* が小麦のサビ病を招くと判断され、パニックに陥った農家によって多くが駆除された (Coats 26, Sumner 337)。一方、日本の種が米国ニューイングランドに持ち込まれたのは1875年にロシアからボストンのアーノルド植物園に送られたものが最初だとされている (PCA Alien Plant Working Group)。なお、移入された日本原産のメギはどんどん繁殖して、他の植物を駆逐したので、日本産メギはスイカズラ同様、今では米国で侵入種として嫌われているようである (Sumner 336-37, PCA Alien Plant Working Group)。
- 6) なお、他に札幌農学校で1880年5月に採取したとされる標本もあった。
- 7) 牧野では綴りが *hiemale* となっている (I 301) が、同じものである。
- 8) この花は日本ではハルジオン (春紫苑) と呼ばれ、牧野によれば、「北米東部原産、大正年間に関東の都会や郊外に帰化し、今日関西にも広がり野原や道ばたにはえる多年草」(II 23) である。

参考文献

Breck, Joseph. *New Book of Flowers*. 1866. N.Y.: Orange Judd Company, 1966. Reprint from the collections of the University of California Libraries. Print.

“Charles Wright (1811-1885).” *Library of the Gray Herbarium*. Harvard University Herbaria Home Page. n.d. Web. 18 Feb. 2014.

Coats, Alice M. *Garden Shrubs and their Histories*. N.Y.: Simon and Schuster, 1992. Print.

- Cole, Allan B., ed. *A Scientist with Perry in Japan: the Journal of Dr. James Morrow*. Chapel Hill: the University of North Carolina Press, 1947. Print.
- Dwellely, Marilyn J. *Summer & Fall Wildflowers of New England*. Camden, Maine: Down East Enterprise, Inc. 1977. Print.
- Eaton, Amos. *Manual of Botany for North America: containing generic and specific descriptions of the Indigenous Plants and Common Cultivated Exotics, growing North of the Gulf of Mexico*. Fifth Edition. Albany: Websters and Skinners, 1829. Print.
- Emily Dickinson's Herbarium*. A Facsimile Edition. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 2006. Print.
- "Gray Herbarium." Included in "Specimens Databases." *Harvard University Herbaria*.
- Habegger, Alfred. *The Life of Emily Dickinson: My Wars Are Laid Away in Books*. NY: Random House, 2001. Print.
- Hawks, Francis L., ed. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy*. 3 vols. Washington: Beverley Tucker, 1856. Print.
- Homeopathic Remedies*. Influenza ltd., 2001. Web. 6 Aug. 2013.
- Jarvis, Beth. "Horsetail." *Horticulture Yard & Garden*. Univ. of Minnesota Extension, Feb. 1999. Web. 15 October 2013.
- Johnson, Thomas H., ed. *The Letters of Emily Dickinson*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard UP, 1958. Print.
- Morrell, Lea Anne. "Wright, Charles," *Handbook of Texas Online*. The Texas State Historical Association, 2013. Web. 21 September 2013
- National Invasive Species Information Center. "Japanese Barberry." *Invasive Species: Plants*. National Agricultural Library, United States Department of Agriculture, 27 March 2013. Web. 18 September 2013.
- "North Pacific Exploring Expedition Collection, 1852-1861." *Historical Expeditions*. Department of Botany, National Museum of Natural History. 2014. Web. 4 Feb. 2014.
- PCA (Plant Conservation Alliance's) Alien Plant Working Group. "Japanese Barberry." *Weeds Grown Wild: Alien Plant Invaders of Natural Areas*. National Park Service, Center for Urban Ecology, 7 July 2009. Web. 17 Sept. 2013.
- Phelps, Lincoln. *Familiar Lectures on Botany, including Practical and Elementary Botany, with Generic and Specific Descriptions of the Most Common Native and Foreign Plants and a Vocabulary of Botanical Terms, for the Use of Higher Schools and Academies*. Hartford: F. J. Huntington, 1832. Print.
- Prof. Summer's Web Garden: Japanese Wild Flowers*. N.p. 24 April 2009. Web. 2 Sept. 2013.
- RHS Gardening*. The Royal Horticultural Society, 2011. Web. 8 Nov. 2013.
- "Specimens Databases." *Harvard University Herbaria*. Harvard University, 2009. Web. 20 Sept. 2013
- Sponberg, Stephen A. "The First Japanese Plants for New England." *Arnoldia* 50.3 (1990): 2-11. Print.
- Sumner, Judith. *American Household Botany: A History of Useful Plants 1620-1900*. Portland: Timber Press, 2004. Print.
- USDA Plants*. Natural Resources Conservation Service, United States Department of Agriculture, 31 March 2013. Web. 19 Sept. 2013.
- 牧野富太郎、『コンパクト版 原色牧野日本植物図鑑』、全3巻。東京：北隆館、2012。Print.
- 佐竹義輔、大井次郎、北村四郎ほか編、『日本の野性植物 草本』。全3巻。東京：平凡社、1981年。Print.
- 清水規宏、森田弘彦、廣田伸七 編・著、『日本帰化植物写真図鑑』。東京：全国農村教育協会、2001。Print.
- 鵜野ひろ子、『エミリ・ディキンソンと日本の花（1）—*Lonicera Japonica* Japanese Honeysuckle』。『神戸女学院大学論集』60.1（2013年6月）：193-203。Print.



写真1 *Lonicera morrowii*
 “Hakodadi, Japan/ William & Morrow”
 GH56620 (HUH)



写真2 *Lonicera japonica*
 “Shimoda, William & Morrow”
 GH518575 (HUH)

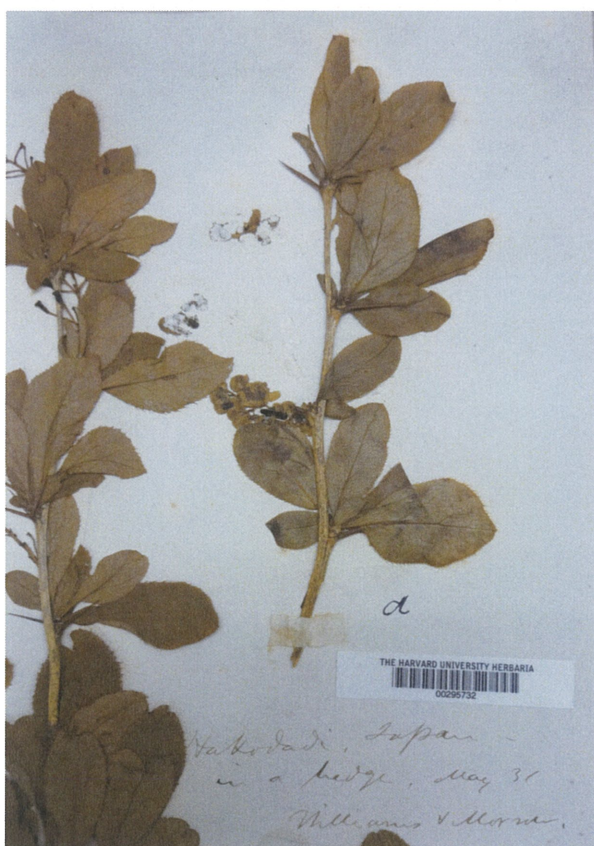


写真3 *Berberis vulgaris* “Hakodadi, Japan /
 in a hedge, May 31 / William & Morrow”
 GH295732 (HUH)

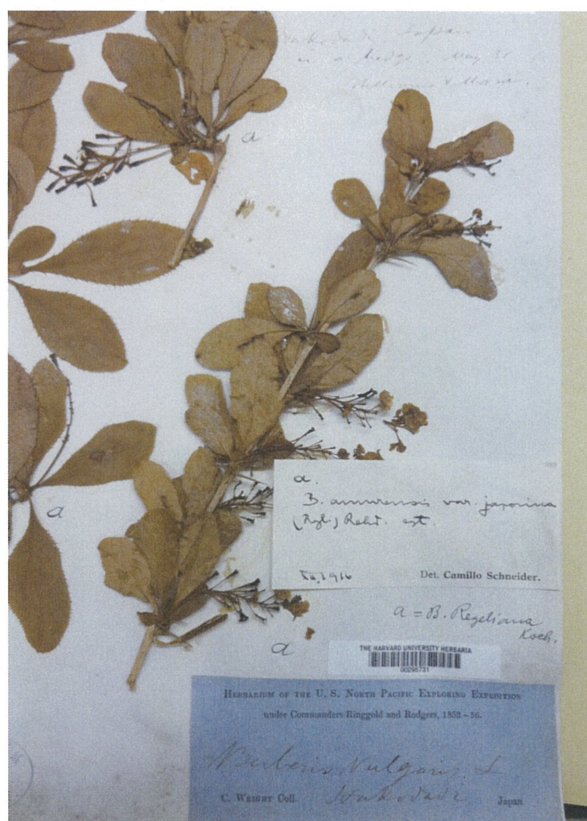


写真4 *Berberis amurensis var. japonica* U. S. North
 Pacific Exploring Expedition under Commanders
 Ringold and Rodgers, 1853-56.
 “C. Wright/ Hakodadi, Japan” GH295731 (HUH)



写真5 *Calendula officinalis*
 “Yokohama, Japan / W. & Morrow”
 GH518579 (HUH)

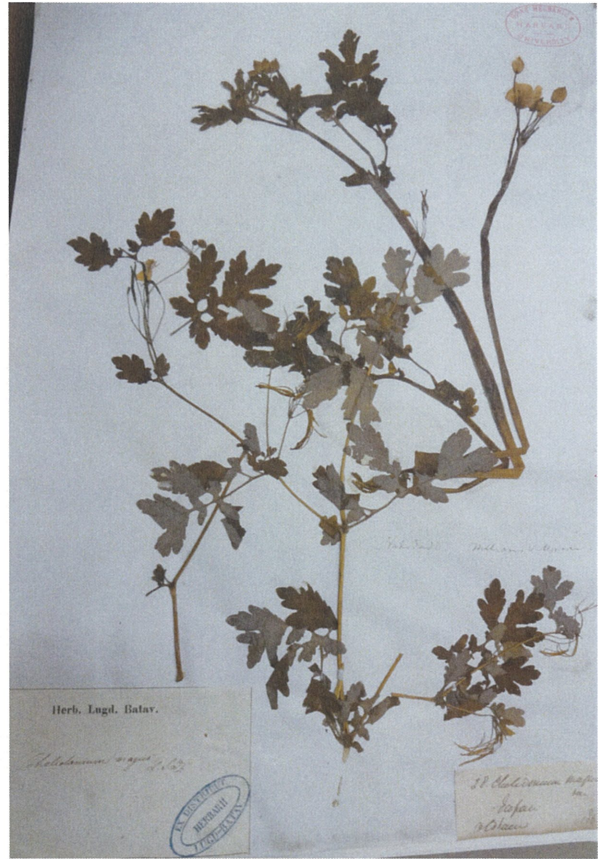


写真6 *Chelidonium majus, japonica*
 “Hakodadi, William & Morrow”
 GH 不明 (HUH)



写真7 *Erigeron thunbergii* var. *glabratum*
 (左下) GH6928 (HUH) and
 “Yokohama, Japan William & Morrow”
 (左上) GH518578 (HUH)



写真8 *Erigeron thunbergii* var. *japonicus*, “Wright, Simoda,”
 (右) GH518577 and
 “Mts tops, Simoda, Japan / W. & Morrow”
 (左上) GH518576 (HUH)